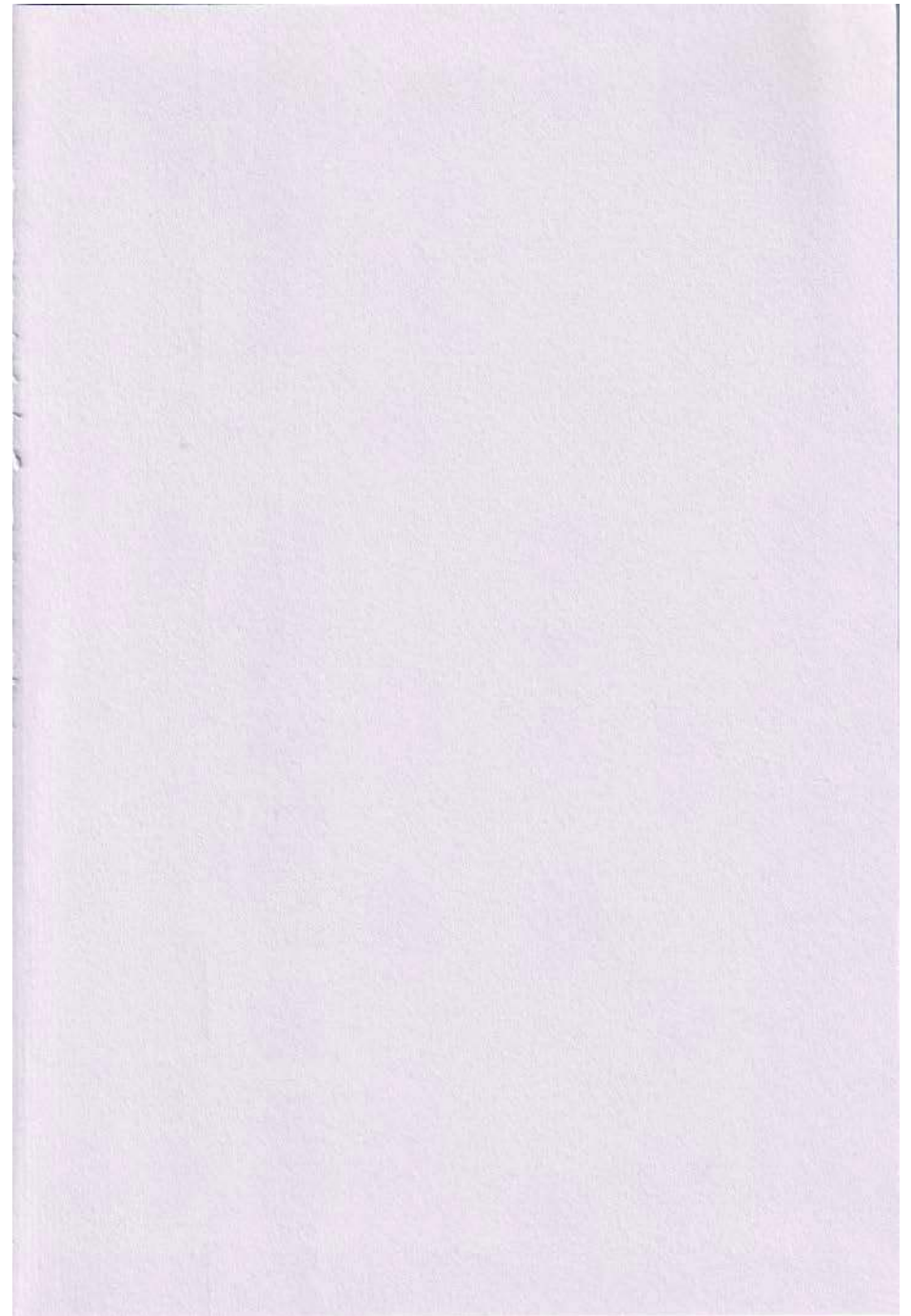


雲のソナチネ

山歩きの雑記帳から

粕谷 俊 矩
Toshinori Kasuya



目次

雲のソナチネ	4	万助小舎	38
白鷹山 九九四 m	7	鶴間池	40
石見堂岳 一二八六 m	10	頭殿山 大島亮吉の「小さな三つの峠」	44
虚空蔵岳 一〇九〇 m	14	大朝日岳 ヒメサユリの咲く頃	52
草鞋 わらし 朝日連峰・古寺川	20	木洩れ日の山 面白山 一二六四 m	58
薬山 一四六二 m 小さな登山者に	24	詩人の竜胆	64
古寺の猫	32	山日記 鳥海山文珠岳	65
湯ノ沢岳	68	ピレネーの二つの谷 (1)	116
飯豊連峰石転び沢	74	ピレネーの二つの谷 (2)	124
月山 ある悲しみ	80	フランス・ローヌアルプス	130
堂木沢山 一〇〇三 m	86	小さな岩壁登攀 (1)	136
鳥海山南面の小ピーク 鳳来山	92	フランス・ローヌアルプス	142
赤見堂岳 一四四五 m	96	小さな岩壁登攀 (2)	148
南郷岳 六八一 m	102	小さな岩壁登攀 (3)	150
ミソサザイ	108	あとがき	150
ヤマユリの咲く草原にて	110	初出一覧	150
ビーグル海峡の朝	114		
パリの山	115		

雲のソナチネ

山から戻ったとき 長女がピアノを弾いていた

クレメンティのソナチネ ハ長調

次女は 窓際の机で 灯りもつけないで本を読んでいた

娘たちの母親は 洗濯もののアイロンがけ

末娘が 寄ってきて 小さな声で おかえり

陽の降り注ぐ 山のてっぺんで

イワツバメや ホソバウスユキソウなどと

ずいぶん長いこと話し込んだので

家に戻った登山者は しばらくのあいだ

人間の言葉が 見つからない

だから そそくさと 山道具を片付ける

山頂の岩に腰かけて聞いた 雲のソナチネの話は

明日に してあげよう

飯豊連峰石転び沢



巨石が転がる雪渓

山名 飯豊の地図を眺めるたびに、^{メロ}机差岳とか梅花皮岳など、ルビがなければ到底読めそうもない(ぼくだけでも知れないが)山名が出てきて、面喰らってしまう。ぼくは長年、それ等の地名は当て字か何かだろう、と勝手にきめこんで、辞書に当たって調べてみようともしなかった。愚かにも、エブリはイブリの訛りでは、とまで疑っていた。ところが、それらはすべてわが怠慢ゆえの無知だった。

『広辞苑』には「えぶり」柄振・机」農具の一。穀物の実などを掻き寄せ、または水田の土をならすのに用いる。(中略)「いた」柄振板」塀または出桁(だしげた)などの端を隠すために用いる化粧板」と解説し、なんとその柄振板

の挿絵まであるではないか。机差岳は山の形が柄振板に似ていることから付けられた名前に違いない。納得である。また難読と言ってもいい「梅花皮」についても広辞苑は次のように解説している。《かいらぎ「梅花皮・鰯」①硬い粒状凸起あるアカエイに似た魚の背面中央部の皮。(中略)さめかわ。②茶道で、井戸茶碗見所の一。焼成



不十分なため釉(うわすり)のちぢれた様が「かいらぎ」に似る。》と詳しい。梅花皮岳の名はその地層あるいは植生を不規則な釉の流れに見立てたのだらう。つまり解説②である。

雪渓

長い雪渓を登って稜線に達するルートとしては、石転び沢雪渓は東北唯一と言ってもよいかも知れない。真夏の登山者にとってはその涼しさが魅力だ。だが、その名が示す通り、落石の危険も伴う。岩場の落石は金属的な音で気が付くが、雪渓上の落石は音がないう。雪しぶきをあげて飛んできても直前まで気が付かないことがある。特にガスが濃い時は怖い。

この雪渓では過去にヒヤリとした経験をしている。雪渓の崩壊である。ある夏、十人程のパーティーで石転び沢を目指した時である。左岸の夏路が終わり、雪渓を渡り対岸に移ろうと雪渓の中ほどまで来た時、雪渓の中央部が大音響と

ともに大きく崩れ、Vの字になったのである。先頭を歩いていた私と数人が対岸に這い上がり、残りの数名が渡りきらないまま取り残された。とつさに人数を数えた。流された人はいない。全員無事だった。雪渓の上部を迂回してきたメンバーが右岸に渡り、全員が合流した。ショックから立ち直るために、パーナールを出して湯を沸か



雪渓の登りに4時間かかった

してお茶を淹れ、お菓子を食べた。気を取り直して出発しようとした時、一人が腰を上げようとしないうちに腰が立たないというのだ。「腰が抜ける」という言葉は知っていたが、現実にはそういうことがあることを初めて知った。仕方がないので一度背負ったザックを降ろして休憩を延長した。あの時の大音響は忘れられない。

天上の青

二〇一三年七月二日、晴天。久しぶりに石転び雪溪に向かった。今回は八名のパーティー。温身平（ぬくみだい）はまだ夜の匂が残っている。ブナやアオダモの巨木の森。遊歩道沿いにいろいろな解説が掲示されている。その一つに、ストレス・ホルモンであるコルチゾールなる物質の唾液中濃度が森林浴によって減少する、という現象を都市部と森林部と比較してグラフ付きで説明されている。コルチゾールは森林を歩いた後より、森林にしばらく座った後の方

がより少なくなる、ということである。ということは、森林の中で一晩でも二晩でも寝ればさらに効果的なストレス解消になるはずだ。今日、子どもたちの「いじめ」対策に大人たちが頭を抱えているが、森の中に学校を建てればいいのだ。もしくは学校の周りに木を植えて森を作るのだ。

「温身平」という大きな道標のある登山口から、遙か彼方の稜線に小さな梅花皮小屋が見える。今日はあの小屋まで登り、更に北股岳を越え、門内小屋まで行くのだ。爽やかなセルリアンブルーのエゾアジサイが登山路の両側で私たちを迎えてくれる。この花の天上の青には精神の浄化作用がある。「うまい水」という洒落た看板の下がった水場で朝食。木陰を流れ落ちる冷たい沢水は確かにうまい。それにしても「うまい水」という名も単純で、微笑ましい。梶川の出会い付近では大きな高巻を強いられる。梶川と梅花皮沢の合流点



遠く山を大きく見せる 76



行く手通か



コバケイソウの群生(北股岳)



鳥帽子方面を望む

から雪溪が始まる。雪溪の方が涼しく、アップダウンもなく歩きやすいことは分かっている。雪溪の誘惑を退け、私たちは夏路を行くことにした。あの雪溪崩壊の悪夢があったからだ。左岸の夏路は通る人が少ないらしく、ところどころ道型が不明瞭になる。

ピッケル

門内沢と石転び沢の合流点はまだ傾斜が緩いがアイゼンを着ける。雪が解けたばかりの草付斜面で動いている人がある。声をかけると、山菜を採っているのだという。珍

味を求めてこんな谷の奥にまでやってくる人がいるのだ。ぼくはザックと背中の中にピッケルを斜めに差す。必要な時はザックを降ろさなくとも何時でも手に持てるからだ。肩甲骨や背中当たって嫌だという人もいるが、ぼくはこの持ち方が好きだ。佐々木小次郎を気取るわけではないが、いつも背中にピッケルの存在を感じられるのがある。それはぼくに山と言うものを教えてくれた池田昭二先生のスタイルだった。生徒は先生の仕草まで真似するものだ。

ぼくがピッケルという山道具を初めて手にしたのは小学二、三年生の頃だったと思う。父の持ち物だった。鍋釜の外には趣味や遊び道具など一切ない貧乏所帯にとつてピッケルは不似合存在だった。幼いぼくは、ピッケルの使い道など当然知るわけもなく、おもちゃ代わりに、土を掘って水を流す遊びに使っていた記憶がある。父は二十二歳で山形三十二連隊に入隊し、盛岡陸軍予備士官学校入校した直後、二十三歳で失明した。除隊したのち、山形盲学校に入り、点字を覚え、マッサージ師となった。貧しい暮らしだった。ある時、鉱山を探し歩き回っている人物にピッケルを売ってしまったらしい。山に登れなくなった自分の運命を受け入れ、山への憧れと一緒にピッケルを手放してしまったのだ。小さな村の貧しい屋根葺き職人の家に生まれた父が、何を思っ

てアルピニズムの象徴であるピッケルを手に入れたのだろう。鍛



夕日にはしゃぐ

だが、明日の日程を考えると、今日中に門内小屋まで足を延ばさなければならぬ。
トキちゃんも戯れにクニイさんのザックを背負ってみた。その重さに足元がふらついて数歩も歩けない。クニイさんのザックはいつも重い。今回もみんなに配るための飲み物や食料を背負ってきたのだろう。いつもトップを歩くはず

のクニイさんが今日の雪溪の登りで遅れがちだった。先輩のイイノさんが忠告する。「クニイさん、自分の飲み物や食料だけでいいんだよ。頼みのクニイさんがバテたら困るんだから」。ぼくも「そうだよ、クニイさん」とイイノさんに同意する。クニイさんは、「いやー」と曖昧な返事をして笑っている。門内小屋に着くと、案の定、クニイさんのザックから缶ビール、ワイン、ソーセージ、果物、茹でた枝豆までが出てきた。イイノさんもぼくも空のコップを差出した。名古屋から来たという同宿のご夫婦も仲間に入れて小さな酒宴となった。夕日が沈むぞ、という仲間の声。風が強く、寒かったのでみんなで肩を組んで日本海に沈む夕日を見た。ぼくたちの顔が赤く染まったのはもちろん夕日のせいだけではない。次の山でもクニイさんのザックは重だろう。(と、ぼくは秘かに願っている。)

(二〇一三年七月二一、二二、二三)



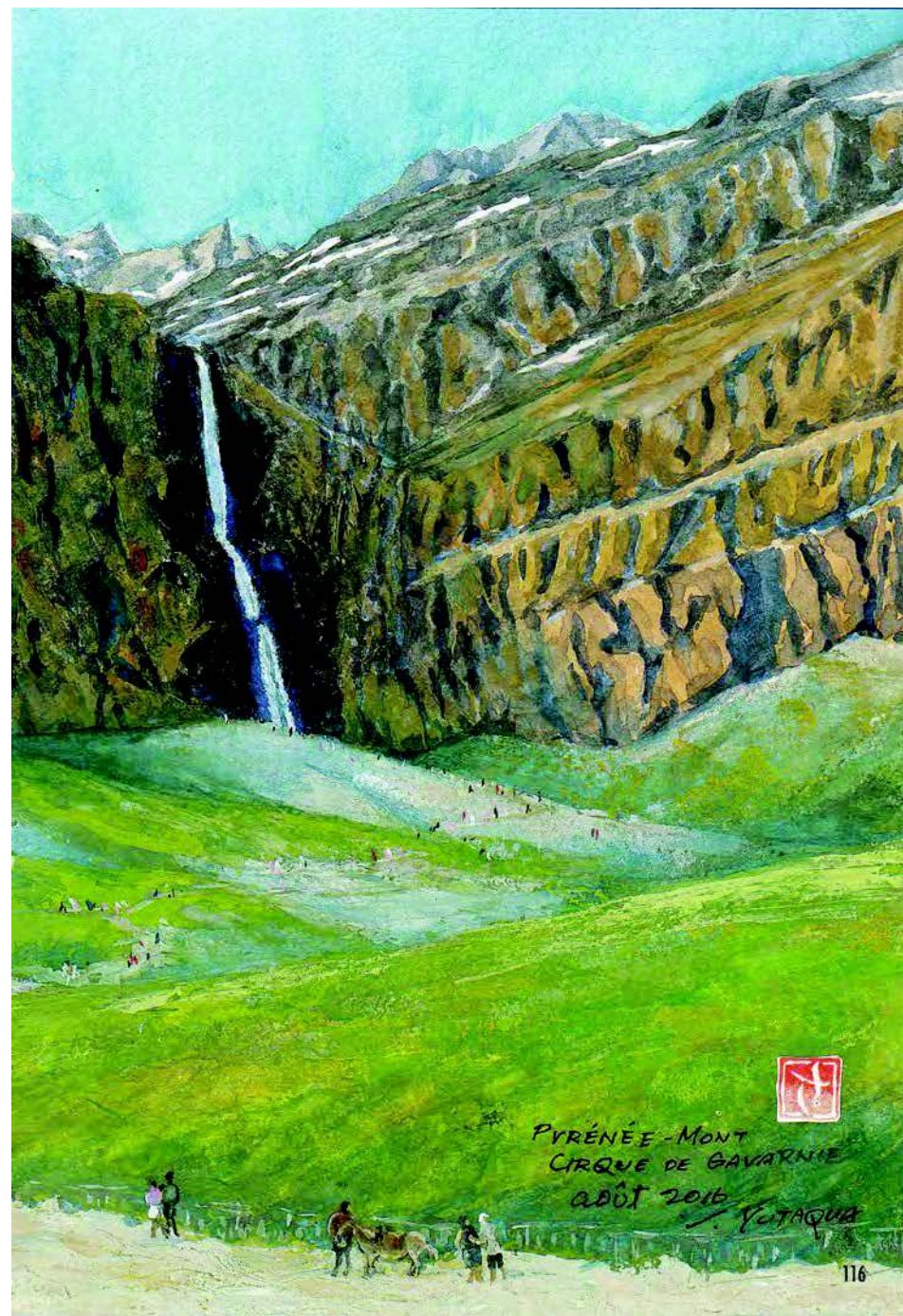
治屋に打ってもらったのか、それとも買い求めたのか。ピッケルを手に入れたのが軍隊に入る前だとすれば、十代後半であろう。父は雪山にステップを刻んだらうか。ぼくはピッケルについて何もたずねなかった。失われた若き日の夢を思い起こさせる必要もない。十代の父が山への憧れを持っていたということを知っただけで十分だった。ピッケルのことを息子に語ることなく、父は九十五年の人生を閉じた。
梅花皮小屋
ぼくたちは、はじめお喋りしながら雪溪を登っていたが、やがて口数が少なくなってきた。標高二〇〇m附近、ほん石転び沢との出会い付近から傾斜がきつくなってきたからだ。北股沢から押し出された岩石流が雪溪の中央部に大蛇のようにうねっている。この夏の豪雨の激しさを物語っている。草付の中之島に取りついたところを昼食とする。最上部の雪溪は四

十度近い急傾斜をトラバースしなければならぬ。ロープを出して安全を確保する。予定より一時間も遅れて梅花皮小屋に着く。雪溪を吹き上げる風と違って、稜線の草原を吹き上げる風には匂いがある。アイゼンを履いたまま、ガチャガチャ音を立てて歩き回ったの

で小屋の管理人がぼくたちの到着に気付いて、小屋から出てきた。ぼくたちの労をねぎらい、水場の位置を教えてくれる。日焼けして健康そうで(当然だが)逞しい青年だが、言葉遣いがとても丁寧で優しい。こういう青年は町ではめったに会えない。小屋番の青年に魅かれてこの小屋に泊まりたくなっ



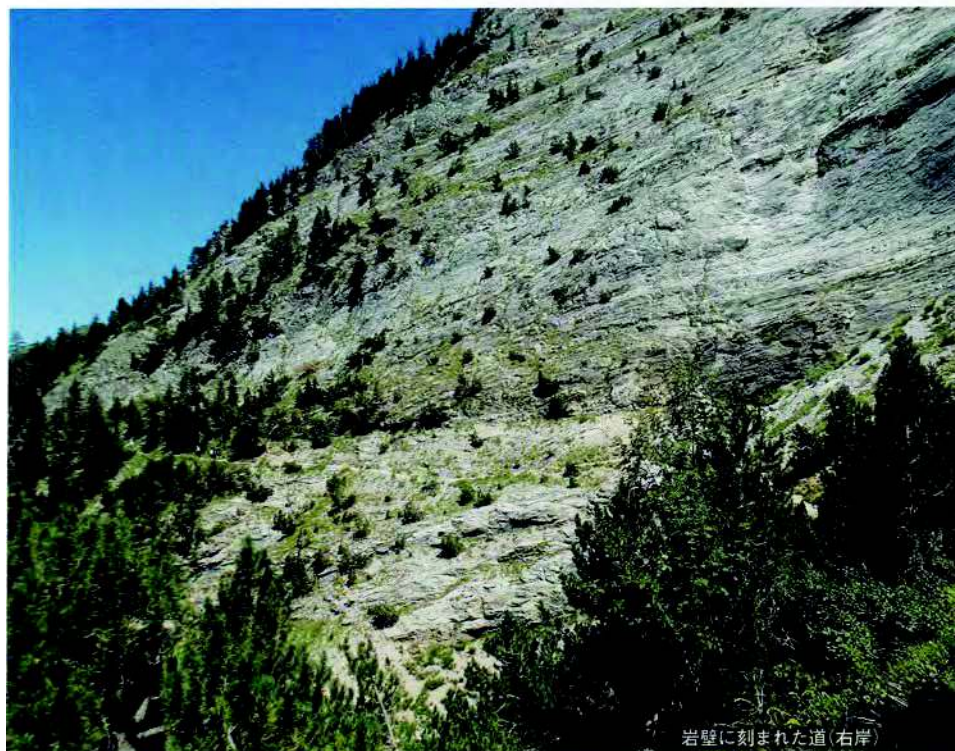
遠くに門内小屋が見えてきた



ガヴァルニの谷
二〇一六年八月十日、斎藤氏の令嬢花実さんの家族にガヴァルニ谷の入り口の村まで送ってもらった。ボルドーの五〇km南、パランティス・アン・ボルヌに住む花実さんは夫君クリストファーと一緒に三人の男の子を育てながらワインの輸出を生業とする若き実業家である。

標高一三六〇mのガヴァルニ村には、ホテルやレストラン、土産物屋や登山用具店が並ぶ。狭い谷間の駐車場にはEU諸国からやってきた車がところ狭しと並んでいる。これほど多くの人々がやってくるのは谷の奥に四二三mの高さを誇るヨーロッパ最大の滝があるからだ。ガヴァルニ川に沿って幅広い九kmの遊歩道が滝の1km手前まで続いている。村には老人や子供や歩きたくない人のために、ウマやロバが待機している。

ぼくたちも滝を目指した。日蔭のない土ぼこりと馬糞の道避け



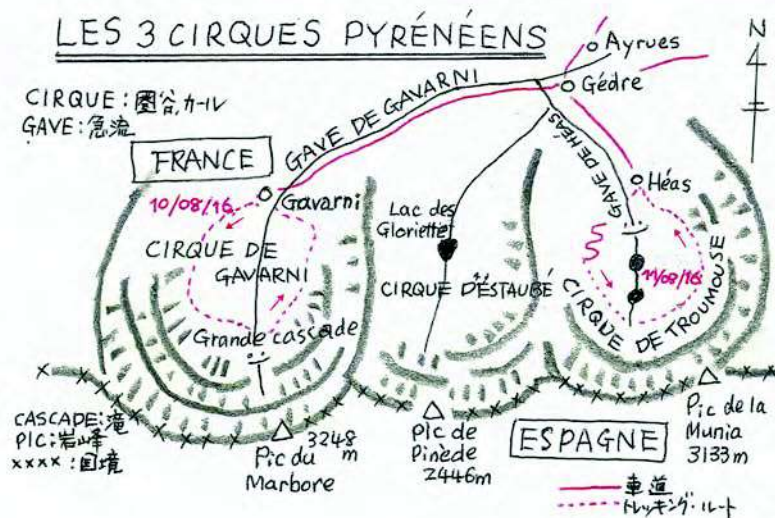
岩壁に刻まれた道(右岸)



ブナの森を歩く



LES 3 CIRQUES PYRÉNÉENS





合流する。手を繋いで元気に歩く若い男女、腰かけた石から立ち上がろうとしない太った女、それを急かす瘦せた夫、子供を乗せた口バ、老人を乗せたウマ。こうしたいろいろな人々が滝に引き寄せられる。人はなぜこれほど滝に魅せられるのだろう。標高一五五〇mの歩道終点にはレストラン兼ホテルがある。ウマもロバもこまでだ。ここから一km先の滝までは歩きにくい岩屑の道を二〇〇mほど登らなければならない。

滝のしぶきが掛るところまで登って滝を見上げ、しぶきを浴び、一緒になった見知らぬ青年と交互に写真を撮った。滝を見上げてみると自分が上昇して行くような浮遊感におそわれる。鯉が竜になるという中国の伝説はこの感覚から生まれたのかもしれない。意外なことこの大滝には滝壺がない。余りに大きい落差のため水が途中で風に流され、滝壺を作るエネルギーを失ってしまうからだ。



滝を目指す人びと



滝の下で(筆者)

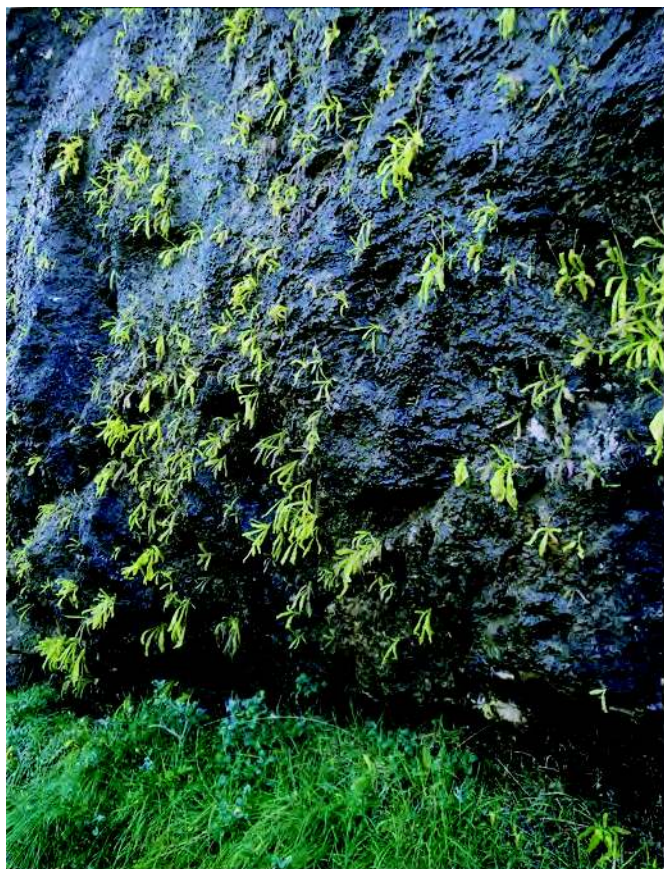
て、少し遠回りになるが、ガヴァルニ川左岸の静かな涼しい木陰の道を選んだ。森が開けた日当たりのいい草地には、マツムシソウ、トリカブト、ナデシコなどの花が咲き乱れ、鋭い棘を持ったビレネー・アオアザミが群生している。

ガヴァルニ谷は垂直の岩壁が半円状に立ち塞がり、三〇〇〇m級の岩山がそれを囲んでいる。一八四三年八月三十一日、ガヴァルニ谷を訪れたヴィクトル・ユゴーは「いったいこれは山なのか、それとも岩壁なのか。どちらでもない。その両方だ」と驚きの言葉をその旅行記に残している。

ブラド・サン・ジャンという滝の見える台地に着いてひと息入れる。谷の上部が雲で覆われているので、滝は空から落ちていっているように見える。しばらく休んでいるうちに谷に陽が射し込み、谷を埋めていた雲が消え、滝がその全容を現わした。垂直の川だ！

山道はやがて賑やかな遊歩道に

(注) Victor Hugo : Voyage vers les Pyrénées Kiron 2001



《岩を登る》ムシトリスミレ

が衰退し、あるいは消滅すること
があれば、それは大滝の消滅を意
味する。ガヴァルニ大滝が消える
日が来ないことを願った。
ぼくたちは小さな流れのそばに
腰を下ろした。そこに目の覚める

ような青のビレネー・アイリスが
咲いていたからだ。このアイリス
は一本ずつ離れて生育する。その
気品ある姿はまさにビレネーの女
王である。その女王のそばで弁当
を広げた。東洋の島からやってき

たぼくたちに女王が微笑んでくれ
た、ように思った。
細長い葉を広げて濡れた岩壁に
張り付いたムシトリスミレを見た。
案内板に「南ヨーロッパ固有の希
少な食虫植物で、ビレネーではこ
の谷と隣のエストーベの谷にのみ
生育する」とあった。日当たりの
いい斜面には茎をもたないチャボ
アザミが葉と花を地面に広げてい
た。温められた地面の熱を効率よ
く利用しようという植物の知恵だ。
迎えに来てくれた花実さんの車
に揺られながら、背後に遠ざかる
大滝のこと、そこに向かう人たち
のことを思い浮かべた。人はなぜ
滝を目指すのかという問いは、な
ぜ山に登るのかという問いと同じ。
エリュ村にある民宿のこの日の
夕食は、キノコを添えた仔牛のス
テーキ。ワインはバスク地方特産
の赤。真夏というのに、日が沈む
と標高一四八mの谷間の村の気
温は一〇度以下にまで下がった。

このヨーロッパ最大の滝の名前が
グランド・カスカード、つまり大
滝、何とも素っ気なく、平凡だ。
後日、何人かのフランス人に滝に
ついてどんなイメージを持ってい
るか尋ねた。個人的な意見だがと
前置きしながら、ある人は滝には
過ぎ去る時間のイデー（観念）があ
るといい、またある人によれば滝
は湧き出る命であり、生きる喜び

を象徴するという答えもあった。
要するに人生そのもののものだ。そ
ういえば滝壺で泳ぎ、ふざけ合う
若者たちの写真を見たことがあっ
た。滝に潔斎やカタルシス（魂の
浄化）を求める文化と違い、いた
って現世的だ。まして滝をご神体
と仰ぎ注連縄を張る思想はない。
帰路もやはり馬糞道を避け、往
路と反対の右岸の山道を下った。

滝が見える最後の曲角で谷を振
り返える。大滝は二段になってい
て、上段の方が大きい。ガヴァル
ニの滝は遠くから眺める滝だ
それにしてもこの滝の未来が案
じられる。水源である上部氷河の
衰退である。現にアルプスでは氷
河が年々後退、縮小している。ビ
レネーの氷河はアルプスとは比較
にならないほど小さい。その氷河



ビレネー・アオアザミ



チャボアザミ



ビレネー・アイリス

あとがき

写真家・佐藤要氏が編集・発行した小さな季刊誌『山歩きの雑記帳』の第八号から三六号に寄稿したエッセイと写真を掲載順に並べ、途中に詩のようなものを挟んでこの本を編むことができました。並べてみると、エッセイに出てくる山は、ほとんどがわが家から見える山、あるいは日帰りできる低い山ばかりです。例外はフランスの山をとりあげた最後の五編で、ビレネーとフランス南部のケラス地方での小さな岩登りの記録です。これは七三歳でパリに語学留学していた二〇一六年夏の山行です。

文章に写真を添えてくださった佐藤要氏、関悠治氏、佐藤新一氏、志田郁夫氏、そして絵を寄せていただいた斎藤豊氏、イラストをいただいた木山由紀子氏にお礼申し上げます。またひとりひとり名前をあげませんが山行きを共にし、エッセイの中に登場していただいた皆さんに感謝いたします。

無精者にとつて登山体験を文章にすることはひと苦勞でした。『雑記帳』の締切りがあったからこそ曲がりなりにもエッセイらしきものを書くことができたと思います。表現の場を与えていただいた佐藤要さんに深く感謝申し上げます。

山に登っている時、私は心の中で岩や雪や風としきりに対話しますが、その文脈はほとんど支離滅裂です。筋道も論理も道理もありません。風や木々と語る獣や鳥たちはきつと明晰な美しいことばを持っているに違いありません。でもぼくは彼らのようなことばを持たないので、手持ちの貧しいことばを拾い集めて間に合わせるしかありません。

どの季節に登っても山は美しいと思います。でも山は人間とかかわりなく存在します。それどころか山は人間を拒絶し、人間を否定する一面もあります。だからこそまた美しいといえます。そして拒絶され否定されながらもなお山に登るのは登山者がシシュフォスの仲間だからかも知れません。

パリではセーヌ河畔のブキニストと呼ばれる露天古書店を眺めながら散歩するのが最高の楽しみでした。ある日、そこで一冊の本が目にとまりました。George Jean : *«Les plus beaux poèmes sur la montagne» le cherche midi éditeur 1997* ショルジュ・ジャン編『山の名詩選』という本です。ためらわずに買い求めました。フランス語圏だけでなく、ドイツ、スペイン、イタリア、中国など、さまざまな国の山の詩、それに日本の俳句まで入ったアンソロジーでした。ページをめくっているうちに、ふとスペインの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカの「山頂」と題する詩にひかれました。その一節。「山の頂に着き 私は歌うその時 私は見るだろう たったひとつの 存在しない星を」(組曲一九二二)。たったひとつの存在しない星が見える、というフレーズが頭の中で響き渡りました。山に行きたくなりました。でもパリから見える山はありません。山が見えない都会で暮らす心もとなさを思い出すと今でも苦しくなります。

本のタイトルは巻頭の詩「雲のソナチネ」からとりました。あの頃、山にばかり登っている父親を娘たちはどう思っていたのだろう。「雲のソナチネ」のことを語ってあげる約束は何年もたった今もまだ果たしていません。

二〇二一年一月

粕谷 俊矩

初出一覧

雲のソナチネ	書き下ろし	
白鷹山 九九四 m	『山歩きの雑記帳』	第8号
石見堂岳 一二八六 m	同	第9号
虚空蔵岳 一〇九〇 m	同	第10号
草鞋 わらじ 朝日連峰・古寺川	同	第11号
葉山 一四六二 m 小さな登山者に	同	第12号
古寺の猫	同	第13号
万助小舎	『萬助小舎二十五周年記念誌』	第14号
鶴間池	『山歩きの雑記帳』	第16号
頭殿山 大島亮吉の「小さな三つの峠」	同	第18号
大朝日岳 ヒメサユリの咲く頃	同	第19号
木洩れ日の山 面白山 二六四 m	同	第20号
詩人の竜胆	同	第21号
山日記 島海山文殊岳	同	第22号
湯ノ沢岳	同	第23号

飯豊連峰石転び沢	『山歩きの雑記帳』	第24号
月山 ある悲しみ	同	第25号
堂木沢山 一〇〇三 m	同	第26号
島海山南面の小ピーク 鳳来山	同	第27号
赤見堂岳 一四四五 m	同	第28号
南郷岳 六八一 m	同	第29号
ミソサザイ	書き下ろし	
ヤマユリの咲く草原にて	『山歩きの雑記帳』	第30号
ビーグル海峡の朝	同	第31号
パリの山	同	第32号
ビレネーの二つの谷 (1)	同	第33号
ビレネーの二つの谷 (2)	同	第34号
フランス・ローヌアルプス	同	第35号
小さな岩壁登攀 (1)	同	第36号
フランス・ローヌアルプス	同	第37号
小さな岩壁登攀 (2)	同	第38号
フランス・ローヌアルプス	同	第39号
小さな岩壁登攀 (3)	同	第40号

粕谷 俊矩 かすやとしのり

1943年生まれ、山形県出身。高校教師、高校山岳部顧問。
〒991-0003
山形県寒河江市大字西根字石川西385-20
phone 090-2981-3599
E-mail kasuya.toshinori@gmail.com

所属 日本山岳会 日本山岳会アルパイン・スキー・クラブ
日本山書の会 日本山岳文化協会 寒河江山岳会
山岳同人のろし

主な海外登山歴

1974ネパール・ムクチナート、ヒマール
1979/パキスタン・ヒンズークシ、パシュカロアン
1982/パキスタン・シムシャル渓谷踏査
1986チベット・カイラス巡礼
1992モンゴル・フィティン峰、ムンハイルハン峰登頂
2004シャモニ・ザースフェ間スキー縦走
2007チベット・ヤラシャンボ峰遠征
2011イタリア・グランパラディッツォ登頂
2016フランス・ローヌアルプス

著書 『シムシャルからパーミールへ』
(共著) 酒田ヒマラヤ研究会1984
『モンゴル・アルタイの夏』
(共著) 酒田ヒマラヤ研究会1994

雲のソナチネ

「山歩きの雑記帳」から

発行日 2021年1月14日 初版発行

著 者 粕谷 俊矩

発行人 佐藤 要

「山歩きの雑記帳」

〒999-7781

山形県東田川郡庄内町余目字土堤下22-7

phone 090-8925-3027

E-mail yamaruzakki@gmail.com

印 刷 北星印刷株式会社

製 本 株式会社渋谷文泉閣

ISBN978-4-906458-37-0

定価はカバーに表示しています。

※乱丁、落丁本はお取り替えいたします。

※本書の無断転載、複写、複製は、著作権上での
例外を除き禁止されています。